

平成 30 年 5 月 16 日現在

機関番号：12101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16592

研究課題名(和文)「二重の経済危機」下における日本の縫製業のジェンダー分析 低価格・高品質の競争力

研究課題名(英文)gender analysis of the japanese ready-made garment industry under the double economic crisis: the competitiveness of low cost and high quality

研究代表者

長田 華子(NAGATA, HANAKO)

茨城大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：20632285

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：2008年グローバル金融危機から東日本大震災へ「二重の経済危機」を経験した日本の縫製産業の実態をジェンダー分析し、日本製の「低価格」かつ「高品質」の商品がどのようにして生み出されているのか、その競争力の源泉を女性労働力の特徴に着目し検討した。 Bangladesh、中国に加えて、日本国内の縫製工場、特に岩手県でのフィールド調査(インタビュー調査と参与観察)を重視し研究を遂行した。結果、長期間継続就業している女性労働力の「技術」に対する貨幣評価が極めて低いこと(雇用形態や賃金水準)、特に、内職者が典型、女性労働力の国籍が技能実習制度を利用することを通じて、多様化していることの2点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This aim of this research is to conduct gender analysis of the Japanese RMG Industry under the “Double Economic Crisis”, which refers to the period from the global financial crisis in 2008 to the Great East Japan Earthquake. The principal investigator conducted a field survey at RMG factories in Iwate prefecture, in addition to in Bangladesh and China. The research, especially in the case of Iwate prefecture, has the following two findings. Firstly, monetary evaluation in relation to the “skill” of the Japanese female labour force who have continued to work for a long time (particularly for those with more than 20 years’ experience), and typically in the case of homeworkers, is extremely low. Secondly, the nationality of female workers has become diverse through the Technical Intern Training Program.

研究分野：アジア経済、ジェンダー論

キーワード：縫製産業 岩手県 Bangladesh 低価格 高品質

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、2008年米国発グローバル金融危機以降の世界経済の特徴を「パックス・アメリカナ」のゆらぎと、それに代わる牽引役としてのアジア、特に中国の「世界の工場」化から「世界の市場」化への移行として指摘し、日系縫製企業の中国からバングラデシュへの国際移転の実態を、ジェンダーの視点から考察し下記の3点を明らかにした。

第1に、1990年代に中国に進出した日系縫製企業は、日本の自社縫製工場を閉鎖し、すべての受託製造商品を海外自社工場で製造していることから「日本的」(縫製)技術の国内継承は、事実上崩壊している点である。第2に、日本の百貨店等で販売される高級アパレル商品の受託製造を中国工場で行っていることから、その「日本的」(縫製)技術は、もはや中国へ移転されており、「日本的」(縫製)技術の保持・継承は、日本から中国への第一次移転先である、中国人女性によって行われている点である。第3に、中国からバングラデシュへの第二次移転先であるバングラデシュ人女性への技術移転は、バングラデシュ工場のジェンダー非対称的な企業組織と技術移転に使用される言葉の問題に阻まれて困難な状況に陥っている点である。

研究代表者は、上述のような海外移転した日系縫製企業の実態を考察すると同時に、これまでに海外移転することなく、日本国内で衣料品を製造し続けている日系縫製企業での調査を行ってきた。特に、東日本大震災の被災地である岩手県(二戸市、久慈市)にはきわめて高度な「日本的」(縫製)技術を用いてアパレル商品を製造している企業が集積しており、研究代表者は東日本大震災後のこうした企業での現地調査(特に経営状況や労働状況について)を実施してきた。

グローバル金融危機、そして東日本大震災へ「二重の経済危機」を経験した日本の縫製産業の現状を考察する過程で、海外に移転した企業と、(海外移転することなく)国内でアパレル商品を製造し続けている企業の双方で見られるのが、「低価格・高品質」のものづくりである。本研究は、「低価格・高品質」をキーワードに、日本の縫製産業の実態をジェンダーの視点から分析することにより、日本でアパレル商品を製造する競争力とは何であるのかを明らかにするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、2008年の米国発グローバル金融危機から東日本大震災へ、「二重の経済危機」を経験した日本の縫製産業の実態を、ジェンダーの視点から分析するものである。特に、日本製アパレル商品の特徴である「低価格」かつ「高品質」の商品が一体なぜ、どのようにして生み出されているのか、その源泉を女性労働力の特徴に着目しながら検討する。その上で、日系縫製産業の国際競争力の源泉が何であるのか、ジェンダー分析す

ることにより明示化する。

3. 研究の方法

研究期間(平成27年度、28年度、29年度)中、研究代表者は、前述の研究目的を明らかにするために、現地調査と文献研究を遂行した。現地調査は、日本(岩手県二戸市と久慈市)と中国(これまでの研究成果で代替したため、本研究では中国調査を実施せず)、バングラデシュに衣料品の製造工場を有する日系縫製企業において実施した。このほか、岩手県では、調査を遂行した二戸市、久慈市の市役所、ハローワーク等での聞き取り調査を実施し、またバングラデシュでは、縫製関連団体や労働組合、またダッカ大学をはじめとする研究・教育機関での聞き取り調査を実施した。調査期間は、いずれの調査も1週間から2週間で、調査手法は、インタビュー調査と参与観察である。

参与観察については、下記の項目を重視した。第1に、対象とする「低価格・高品質」のモノ(具体的な衣料品を取り上げる)の全製造工程を解明し、そこに配置される労働力の属性(性別、年齢、経歴、家族構成など)を聞き取り調査により明らかにすることで、第2に、「高品質」を生み出すうえで重要な熟練労働者を特定し、熟練労働者の作業内容、仕事ぶり、発言、所作に加え、「低価格」を実現するための要因、例えば内職者の受容、当該地域のジェンダー規範などを明らかにし、考察することである。

文献研究は、具体的に下記の3点に焦点を当てて、取り組んだ。第1に、日系企業の高品質、熟練化をめぐる議論を整理、検討すること、第2に、調査地域(岩手県、バングラデシュ)の現状把握、第3に、調査地域の工業化、特に縫製産業の成立過程(歴史的な経緯)と成立要件について、関連の文献を講読し、考察した。

4. 研究成果

(1) 縫製産業と女性就労(日本、バングラデシュの縫製工場調査を踏まえて)

研究代表者は、これまでバングラデシュの縫製工場での調査を通じて、縫製産業がバングラデシュの女性の稼得就労において重要な役割をはたしていることを明らかにしてきたが、本研究における岩手県調査を通じて、日本国内の縫製工場働く女性たちにとっても、(バングラデシュの縫製工場労働者と同様に)縫製工場が重要な意味を持っていることを明らかにした。研究代表者は、2016年3月以降3度にわたり、岩手県二戸市と久慈市の縫製工場を訪問し、女性労働者にインタビューした結果、女性たちにとって、縫製工場での仕事は、「手に職をつける」、「技術職」であり、女性自身が他の女性職種とは異なり、ある種「特別な」仕事として、縫製工場での仕事をとらえていることを明らかにした。縫製工場での仕事は、たとえ、結婚や出産で一

時的に仕事を辞めたとしても、希望すれば生涯就労することが可能な職業であり、かつ土日が休みであることが女性たちにとっては重要な要件であった（特に子供を抱える単身の母親にとって）。

岩手県二戸市や久慈市では、夫の単身賃金のみでは家族扶養をすることが困難であるため、夫婦共働きが必須である。こうした中で、女性賃金は、（その額がたとえ少額であったとしても）家計の中で重視される傾向にある。また家内女性の事例であるが、女性のもつ技術的要素が家庭内で共有され、そうした点が家庭内での女性のエンパワーメントに一定程度寄与していることも明らかにした。〈研究成果：学会発表、 、 〉

（２）低価格・高品質の源泉のジェンダー分析 「技術」に対する貨幣評価の低さ

低価格・高品質の源泉の第１の点は、女性たちが有する「技術」に対する貨幣評価がきわめて低いことである。岩手県の二戸市と久慈市の縫製工場での女性労働者へのインタビュー調査に加えて、ハローワークでの聞き取り調査を通じて、縫製工場での月額賃金が県内のどの産業と比較しても最低レベルであることが分かった。特に、家内労働者に至っては、出来高制であるが、そのレートは著しく低いものである。家内労働者をはじめ、その労働内容は、熟練労働者でなければできないようなある種の「勘」と「応用」力が必要とされるものである。現に、家内労働者の多くが、長期間工場で就労し、（定年および中途）退職した女性たちである。こうした女性たちのもつ技術と能力が、「家内労働」という名のもとに、低賃金労働として搾取されている。家内労働者だけでなく、工場で就労する労働者の賃金も低く、また重労働であることを踏まえて、新規学卒者の入社はその工場も年々減少し続けている（平成 29 年 3 月末高校卒業者の二戸管内就職者 81 名の内、縫製工場就職者は 3 名のみ）。〈研究成果：学会発表 〉

（３）低価格・高品質の源泉のジェンダー分析 女性労働力の国籍の多様化

新規学卒者の入社が減少していることに加えて、その定着率は低く、かつ高齢化に伴い、縫製工場の労働者数は年々減少している。こうした中で、労働者不足の解消の一翼を担っているのが、外国人労働者の存在である。岩手県二戸市、久慈市の縫製工場の中には、技能実習制度を利用することを通じて、外国人労働者を受け入れている工場が複数ある。研究代表者は二戸市の二戸ファッションセンターにて、2017 年 10 月 30 日から 11 月 4 日まで参与観察を実施し、高級婦人ジャケットの製造工程とそこに従事する労働力の属性を調査した。同工場には 8 人のベトナム女性が働いており、彼女たちがどのような作業に従事し、どのような役回りをしているの

か、また縫製現場の日本人女性労働者たちは、彼女たちをどのような存在として認識し、日々共に服作りに従事しているのかを明らかにした。ベトナム人実習生は、工場の中で欠かせない労働力となっており、かつその内の数人は日本人熟練労働者とはほぼ同等に仕事ができる「中核」労働者として生産に携わっている。日本人女性たちも、実習生を「技能継承の相手とみなせる」と指摘するほどに彼女たちの能力を認めている。こうした技能実習制度の利用を通じた、労働者の国籍の多様化が、低価格・高品質の源泉に寄与している。〈研究成果：図書 〉

（４）ラナ・プラザビルの崩落事故後のバングラデシュ縫製産業と労働者の実態について

研究代表者は、本研究期間中に、単著『990 円のジーンズがつくられるのはなぜ？ ファストファッションの工場で起こっていること』（合同出版、2016 年 1 月）を出版した。特に、2013 年 4 月に、バングラデシュの首都ダッカでラナ・プラザというビルが崩落し、1000 人以上が死傷した産業事故が起き、それをきっかけとして、日本国内でも、バングラデシュ製の低価格衣料を巡って、関心が高まった。こうした状況を背景に、研究書ではなく、広く一般（特に、中学生や高校生でも読める内容）向けに、わかりやすくバングラデシュの縫製産業と労働者の実態について執筆することを目的とした。この著書をきっかけに、茨城県内の高校他、消費者団体などから講演依頼を受けた。〈研究成果：その他、 ~ アウトリーチ活動〉

またラナ・プラザの崩落事故後のバングラデシュの縫製産業と労働者の実態について、現地バングラデシュの日系縫製工場、労働組合等での聞き取り調査を実施し、その動向を、学会発表、論文としてまとめ、成果の公表に努めた。〈研究成果：雑誌論文、学会発表、 〉

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

長田華子、「世界の縫製工場バングラデシュで何が起きているか」、『大原社会問題研究所雑誌』、査読無、法政大学大原社会問題研究所、702 号、2017 年 4 月、pp. 19-29。

長田華子、「インド縫製産業の中の西ベンガル州コルカタ 現地調査から見えてきた現状と課題」、『神戸大学経済経営研究所研究叢書 77 インドの産業発展と日系企業』査読無、佐藤隆広編、神戸大学経済経営研究所、2017 年 3 月、pp.379-407。

長田華子、「グローバル金融危機以降の日系縫製企業の国際移転とジェンダー 第二次移転先・バングラデシュの現状と課題」、『ジェンダー研究』、査読無、19号、2016年3月、pp.65-92。

〔学会発表〕(計 6 件)

長田華子、「南アジアにおける縫製産業と女性労働力 バングラデシュとインド西ベンガル州コルカタの事例から」、科研費・基盤研究A「南アジアの産業発展と日系企業のグローバル生産ネットワーク」(研究代表者神戸大学・佐藤隆広)・TINDAS(南アジア地域研究「東大拠点」)共催研究会、2018年3月17日。

長田華子、「震災以降の東北縫製産業における女性の就労とエンパワーメント 岩手県東北地域を事例に」、第二回東アジア日本研究者協議会国際学術大会、2017年10月28日(国際学会)

Hanako NAGATA, Economic Growth, Industrialization and Gender in Bangladesh, 26th International Association Feminist Economics annual conference, 30th June, 2017. (国際学会)

長田華子、「世界の縫製工場バングラデシュで何が起きているか 労働の課題と企業の挑戦」、『第29回国際労働問題シンポジウム「グローバルサプライチェーンにおける労働の課題」』、2016年10月4日。

長田華子、「990円のジーンズがつくられるのはなぜ? ファストファッションの工場で見えていること」(一般社団法人)日本繊維機械学会・繊維リサイクル技術研究会・第118回情報交換会、2016年3月4日。

長田華子、「グローバル金融危機以降のアジアにおける日系縫製企業の技術移転 第一次移転(日本から中国)と第二次移転(中国からバングラデシュ)の比較ジェンダー分析」、『日本比較経営学会』、2015年5月8日。

〔図書〕(計 4 件)

長田華子、明石書店、「日本製の洋服づくりを支える人々 縫製工場における外国人労働者」、『産業構造の変化と外国人労働者労働現場の実態と歴史的視点』、2018年6月1日刊行予定、pp.202-226。

長田華子、合同出版、『990円のジーンズがつくられるのはなぜ? ファストファッションの工場で見えていること』、2016年1月、157

長田華子、日本経済評論社、「日経縫製企

業の第二次移転としてのバングラデシュ 国際資本移転のジェンダー分析」、『グローバル資本主義と新興国経済』、2015年12月、pp.233-264

長田華子、コモンズ、「低価格の洋服と平和 バングラデシュの縫製工場働く女性たち」、『学生のためのピース・ノート2』、2015年4月、pp.33-52

〔その他〕
アウトリーチ活動として、以下7点に取り組んだ。

長田華子、「ファストファッションから考える 国際貿易と世界経済の仕組み」、『日本国際保健医療学会学生部会主催、国際保健集中セミナー』、2018年3月13日。

長田華子、「ファッションの裏側にあること」、『札幌市消費者センター消費生活講座』、2018年3月7日。

長田華子、「服の消費とわたしたちの暮らし ものづくりの現場からの警鐘」、『第6回東京服育研究会主催、服育定期セミナー』、2017年12月1日。

長田華子、「高校生に伝えたい服のはなし 990円のジーンズがつくられるのはなぜ」、『茨城県金融広報委員会主催、金融教育講演会、古河第二高等学校』、2017年11月17日。

長田華子、「990円のジーンズがつくられるのはなぜ?」、『公益財団法人・日本女性学習財団』、2017年10月3日。

長田華子、「ファッションの裏側にあること~服を買う前に考えてみませんか」、『第20回服育ラボ定期セミナー』、2017年8月4日。

長田華子、「990円のジーンズがつくられるのはなぜ? ファストファッションの工場で見えていること」、『JSA茨城支部講演会』、2017年5月20日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長田 華子 (NAGATA, Hanako)
茨城大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号: 20632285